

銀座北ホテル

樋口修吉



銀座北ホテル

樋口修吉



銀座北ホテル
ぎんざきた

一九九三年一月二五日 第一刷発行

著者 樋口修吉
ひぐちしゅうきち

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇

郵便番号 一〇—一五〇

編集部 (〇三) 三二三〇—六二〇〇

電話 販売部 (〇三) 三二三〇—六三九三

制作部 (〇三) 三二三〇—六〇八〇

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、本社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複製、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1993 SHUKICHI HIGUCHI

Printed in Japan ISBN4-08-772893-5 C0093

銀座北ホテル*目次

第一章	劍術使いの息子	7
第二章	北ホテル	27
第三章	メリケン波止場	52
第四章	脅迫者	70
第五章	暗雲	94
第六章	不思議の国のアリス団	115
第七章	闇の抗争	136
第八章	西から来た男	165

第九章 帽子屋の予感 183

第十章 二人のダッチェス 209

第十一章 逼塞 231

第十二章 師走 249

第十三章 対決 265

エピローグ 284

あとがき 290

装丁 北村 治
題字 戸田 武雄

銀座北ホテル

第一章 剣術使いの息子

1

倉元弥三郎の父方の先祖を迎れば、遠く江戸開府のころ徳川家康とともに三河から移り住んだ御家人に行きつく。

ところが、弥三郎が誕生したころ、そのことを誇らしげに口にする者は周囲にいなかった。

というのも明治政府誕生前の幕府瓦解にともない倉元一族の行動はさまざまに分かれて、本家筋は將軍慶喜とともに静岡へ移住し、血氣に任せて上野の彰義隊に加わった若者は、そのまま函館の五稜郭まで転戦したあげく北海道に住みついた。

かたや江戸に残った者はたちまち零落して、元士族の身分を隠したまま京橋や湊町界限の印刷所で活字を拾う植字工となり、細々と暮らしを立てるようになったからだ。

弥三郎の父親である倉元静馬は、若いころから剣術で非凡な才能を発揮して、本来ならば彰義隊に加わるはずであったが、道場での稽古中に素足に釘が刺さったことから高熱を発して、江戸に残る羽目になった。

明治の新政府のもとで働く気がさらさらなかった静馬は、やがて剣術の腕を買われて両国や深川不動前で小屋掛けの興行をしている見世物の一座に加わるようになった。そして、明治の中頃、銀座の煉瓦

街で興行をしているときに地元の露店商の元締め娘に惚れられて所帯をもつことになり、銀座の三十間堀と築地川に挟まれた木挽町^{こびき}の長屋に新居をかまえた。

そんな父静馬と母八重とのあいだに倉元弥三郎は、明治三十一年に誕生した。

明治三十一年といえは明治維新から三十年を経過しており、当時の銀座はすでに文明開化にふさわしい西洋の雰囲気漂わせていた。それと同時に、江戸下町の香りも色濃く残っていた銀座が大きく変貌するきっかけになったのは、明治五年に和田倉御門内にある旧会津藩の屋敷から出火した通称、和田倉火事で、銀座の全域と木挽町から築地へかけての三千戸あまりが焼失した。

当時の東京府知事だった由利公正は、その機会をとらえて銀座一带に建築制限令を発し、木造家屋の建築をいっさい禁じて、新しい建物を煉瓦造りに限り、道路も拡張することにした。

イギリスの技術者トーマス・J・ウォータースを顧問にして大工事を行った結果、明治七年には銀座一丁目から八丁目にかけて表通りの東西両側に一等煉瓦地と煉瓦の舗道が完成し、さらに四年がかりで東西の横丁や裏通りにも二等煉瓦地、三等煉瓦地が出来上がった。

煉瓦地は完成後に民間へ払い下げられた。一等煉瓦地は一坪あたり六十三円、二等煉瓦地は五十円、三等煉瓦地は四十二円で、三分の一を即金、残りは百五十カ月の月賦という条件であった。

ところが、由利公正が自信をもって完成させたヨーロッパ風の銀座通りは、予想に反して悪評だらけであった。

へ煉瓦普請のなかに住むは、ヤモリ、ムカデのたぐいで、人もしこれに住むときは、かならず青ぶくれとなりて死すべし」と信じる連中が多くて、なかなか買手がつかなかったのである。

表通りの建物にしたところで一軒だけ売れたとしても、そのあと二、三軒は空き家がつづくといった状態だったが、この櫛の歯の欠けたような銀座の町並みに目をつけたのが、両国や深川不動前の盛り場を牛耳る香具師^{かぐし}たちであった。

さっそく空き地を利用して、玉乗り、手品、熊の相撲、猿の芝居などの見世物を開き、倉元静馬の加わった剣術を中心とした笑覧会も小屋掛けをし、轢^ひを風にはためかす状態が五、六年間にわたってつづいた。

銀座がなんとか面目を一新するのは、鉄道馬車が新橋から日本橋まで通じるようになった明治十五年からだ。

このころになると銀座通りにはアーケ灯が設置され、築地の居留地に住む外国人も家族連れで訪れてくるようになった。

明治二十三年になると鹿鳴館の近くに帝国ホテルが誕生し、日清戦争のはじまった明治二十七年には銀座八丁目に千疋屋がオープンし、弥三郎が生まれる前年の明治三十年には資生堂がアイスクリームとソーダ水の小売りを開始した。

弥三郎が生まれた場所は、三十間堀に近い木挽町三丁目の一角であった。

三十間堀は、慶長十七年に竣工した堀川で、川幅が三十間あったことからそう名づけられ、江戸末期には兩岸に多くの船宿が立ち並んでいた。

弥三郎が生まれたころ、銀座通りから近いのに江戸の残滓^{ざんし}を残していた木挽町の一日は、物売りの声ではじまった。

早朝は納豆売りや鰯売りの声、豆腐売りのラッパの音が響き、昼間には研ぎ屋、ザル屋、青竹屋が、「鉄剃刀とぎい、庖丁ナイフとぎい」

「ざるやあ、味噌こし！」

「竿竹やあ、青竹！」

とそれぞれ声を張り上げるし、ときには煙管直し専門の羅宇屋^{らおや}が吹く笛の間延びした音や、定齋屋^{じょうさいや}と呼ばれた薬屋の青貝を散らした薬箱が「カッターンカッターン」と鳴る音にまじって、

「甘い薄荷^{はっか}いりの栗の水飴でござあい」

という水飴売りの声が聞こえてきた。

午後のお八つどきになると「こうばしや、かりんとう」という花林糖売りの声がしたし、夕暮れどきには惣菜の煮豆売りが路地裏にまで現われて、夜には新内流しの三味線の音や按摩^{あんま}の笛の音が響くのであった。

そのほかにも季節によつてはおおずき売り、苗売り、金魚売りなどの声がしたし、そうした呼び売りだけでなく、ときには「灰やあー、灰い」と灰を買う人も現われた。これは竈^{かまど}の灰を畑の肥料にするためであった。

年末年始になると着物に角帯姿で頭を丁髷^{ちようきげ}に結った暦^{こよみ}売りが現われたし、正月二日になると、初夢用に印刷された宝船を売る子どもたちの威勢のいい声がした。

「お宝、お宝、宝船、縁起がいいから買ってくれ！」

弥三郎が幼いころには、この宝船を枕の下に敷いて寝ると、縁起のいい初夢を見ることができると本気で信じているお年寄りが多かった。

弥三郎が生まれ育った木挽町はおろか当時の日本橋から新橋にかけての一带は、周辺を川や掘割に囲まれていて、まさしく「水の街」であった。

もともと日本橋、京橋、八丁堀、築地、銀座、新橋に至る一带は、徳川家康が江戸開府のときお茶の水の裏手の神田山を崩した土砂を使って十三年がかりで埋め立てた土地だけに、川や掘割が縦横に流れていた。

たとえば銀座にしても、現在の状況からはとても想像できないけれども、半世紀前までは周囲が川や掘割だらけであった。北の方角に京橋川、南には汐留川が流れていたし、西には汐留川から土橋、山下橋、数寄屋橋、丸ノ内橋、有楽橋を経て京橋川に至る外堀があり、東は三十間堀で、さらにその先には

築地川があった。

それほど川や掘割を造ったのは、埋め立て地なので水はけをよくするため、また火事にそなえての防火用水とするため、そして交通路として船を利用するためだろうと伝えられている。

京橋川ひとつを例にあげても、青物市場として栄えて舟が頻繁に出入りした大根河岸や、竹を扱う問屋の並んだ竹河岸のほかにも佃島の白魚を徳川幕府に献上するとき荷揚げするための白魚河岸などが、その川岸にあったほどだ。

また大小の掘割のほうは、隅田川や神田川の支流はおろか外堀と内堀から江戸城内にも通じていて江戸のころの物資輸送に重要な役割を果たした。

そうした川や掘割に囲まれた土地のなかでも、とりわけ船宿の多かった三十間堀と築地川の近くで生まれ育った弥三郎は、子どものときから水に親しんだ。

関東大震災まで木挽町の両側の川は澄みきっていて、川底まで見えたほどだった。

夏になると京橋川や築地川で水遊びする子どもたちが多かったが、弥三郎は泳ぐときには月島まで出かけた。

当時の月島はまだ埋め立てが完了しておらず、おまけに勝鬃橋が掛けられていなかったもので、渡し舟を利用するしかなかった。渡しの向こうには、神伝流、向井流、水府流、観海流といった日本古来の各流派の旗が立った水練場があった。

赤禪姿になった弥三郎は、その水練場で泳ぎまくった。

また築地川沿いには待合が多くて、夕暮れどきになると芸者衆を乗せた人力車が走った。

夏の最大の行事は隅田川の花火だったが、当日の夜、築地川には美しい提灯で飾った屋形船がぎっしりと連なり、船上には涼しげな浴衣姿の新橋の芸者衆が団扇を手にして華やかだった。

ふだんの夏の夜でも、木挽町の家々の裏口に面した風通しのよい路地には、竹の縁台が並んで、銭湯

や行水のあとで首のまわりに汗知らずを真つ白にはたかれた子どもたちが、蠟石遊びや隠れんぼなどをして夢中になって遊びほうけ、その周囲では親父たちが縁台将棋の駒の音を響かせていた。

三十間堀の通りでは月に三度も出世地蔵の縁日が開かれて、この縁日に出かけることは子どもたちにとってなよりの楽しみだった。

毎月七日、十八日、二十九日と、縁日の開かれる日付けが一日ずつ増えることから出世地蔵と呼ばれるのだと、地元の古老に弥三郎は教えられた。

そのお地蔵さんは、三十間堀二丁目の路地を入ったところの小さなお堂に祭られており、縁日するとき狭い路地には赤い幟が並んで、新橋の芸者衆がひっきりなしにお参りに訪れた。

路地を出たところから銀座四丁目の交差点や三原橋にかけては、縁日につきものの夜店がずらりと出たし、ヴァイオリンを弾きながら流行の唄を歌ったあと本を売る書生もいた。

子どもたちにとって夜店での最大の楽しみは買い食いで、お好み焼きの牛天、どんどん焼き、べっ甲飴、しんこ細工、塩味のえんどう豆、蜜バンなどを売る店が並んでいた。

さらにお盆のころになると、松虫や鈴虫を売る虫市や、植木を売る草市も開かれて、これまた子どもたちの人気を集めた。

もっとも弥三郎は連日のように遊んでいたわけではなくて、子どものころから家業の甘栗売りを手伝わねばならなかった。父親の静馬が海外巡業の一座に加わったりして絶えず家を空けたので、母親の手助けをしたからだ。

日露戦争の勝利を祝う提灯行列を、弥三郎はうつすらとしか覚えていないが、鮮明に記憶しているのは、十三歳になった明治四十四年に母方の祖父の代理で、カフェ・ライオンの開店披露に招かれたときのことだ。

明治四十四年は、後の世に名を残す三軒のカフェが銀座に誕生した年だ。まず日吉町（いまの銀座八

丁目）にカフェ・ブランタンが開業し、次いで尾張町の角（いまの銀座五丁目）にカフェ・ライオン、年末には南鍋町（いまの銀座六丁目）にカフェ・パウリスタが開店した。

カフェ・ライオンは、築地川沿いに建っている洋館建てのホテル精養軒が開業した店だった。

金色に縁取られている豪華な招待状を手にして訪れたカフェ・ライオンで弥三郎が瞠目したのは、女給たちの出で立ちであった。

ヘアスタイルは、二百三高地とかサザエの壺焼きと呼ばれた大束髪のヒサシ髪で、服装は全体の形が当時の看護婦の制服にそっくりだった。上着が和服式の元禄袖で、下半身には袴ともスカートともつかぬものがクルブシまでを被い、後に女給の象徴と称された蝶結びを背中にひらひらさせたエプロンはまだしておらず、足にはボタン掛けの靴を履いていた。

カフェ・ライオンは主として生ビールを出す店であったけれども、ビュッフェ式で料理も用意されており、テーブルの中央に巨大な伊勢海老が鎮座して、その周囲にはゼラチン細工のムースが豪華に並んでいたが、弥三郎は、女給の運んでくれたサンドイッチとサイダーだけを口にした。

2

父親の静馬の晩年は穏やかであった。

冥土に旅立つ前夜まで晩酌を欠かさなかったが、いたって物静かな酒飲みで、酒のうえで声を荒立てたことはなかった。

木挽町の長屋には、かつて剣術道場とともに修業した旗本の成れの果て、それに香具師仲間などが絶えず訪ねてきたが、静馬がとりわけ嬉しそうな顔をするのは、遠山という不思議な男が訪ねてきたときだった。

幼いころから家業の甘栗売りを手伝っていた弥三郎は、一目見ただけで、たいていの男性の器量は見当がついた。

ところが、目に凄味のある遠山という初老の人物は、裾野が広い山のように奥深い感じを漂わせており、なかなか尻尾が纏めなかったが、そのうち少しずつ正体が明らかになった。

なんでも右翼の大立者で、若いときに日本古来の芸能を海外へ紹介する大一座を組んでロンドンをはじめとする欧州各地の大都会を経てアメリカのボストンやニューヨークまで巡業したことがあり、その一座のなかに柔術と剣術の達人という触れ込みの静馬も加わっていたという。

底光りのする視線を弥三郎に向けながら往年の勸進元の遠山は、若いころの静馬がけっこう向こう見ずで、ドイツでは横柄な興行師とサーベルで決闘をやり、スペインでは情熱的な貴族夫人との情事を経験し、アメリカでは賭博場の用心棒をしたことまで喋ったあと、

「あんたの親父さんには二度ほど命を助けられたことがあるんだよ」

と真顔で打ち明けてくれた。

そんな遠山の昔話がきっかけとなり、若き日の父親と同じような生き方に憧れた弥三郎は、剣道の町道場に通うようになり、上達するにつれて警視庁の道場にも顔を出すようになった。

やがて二十歳をすぎたときに弥三郎は海外へ渡ることになったが、それは剣道の腕前を買われたからではない。帝国海軍の水兵として、第一次世界大戦のとき占領した中国の青島に駐屯したのである。

弥三郎が、久栄という女性と知り合ったのは二十五歳のときで、関東大震災の起こった日だ。

大正十二年九月一日、帝国海軍を除隊して家業を手伝っていた弥三郎が、銀座八丁目の千足屋の前を歩いていたとき、物凄く地鳴りの音とともにグラグラッときた。

ほどなく有楽町のほうから火の手があがった。すぐに木挽町の家へ戻った弥三郎は、ひとまず両親とともに芝方面に避難することにした。